

〇〇獣

海野十三

青空文庫

眠られぬ少年

深夜の大東京！

まん中から半分ほど欠けた月が、深夜の大空にかかっていた。

いま大東京の建物はその青白い光に照されて、墓場はかばのように睡っている。地球がだんだん冷えかかってくるようで、心細い気のある或る秋の夜のことだった。その月が、丁度ちようど宿やどっている一つの窓があつた。その窓は、五階建ての、ネオンの看板の消えている、銀座裏の、とある古いビルディングの屋上に近いところにあつて、まるで猫の目玉のようにキラキラ光っていた。

もし今ここに、羽根はねの生はえた人間でもがあつて、物好きにもこの窓のところまで飛んでいったとしたら、そしてその光る硝子窓ガラスのなかをソツと覗のぞいてみたとしたら、そこに一人の少年が寢床ねどこに横よこわつたまま、目をパチパチさせて起きているのを発見するだろう。敬二けいじ——といった。その少年の名前である。

大東京の三百万の住民たちは今グウグウ睡っているのに、それに大東京の建物も街路も電車の軌道も黄色くなつた鈴懸けの樹も睡っているのに、それなのに敬二少年はなぜひとり目を覚ましているのだろうか。

「本当にそういうことがあるかも知れないねえ——」

と、敬二は独り言をいった。なにが本当にあるかも知れないのだろうか。

「——原庭先生が嘘をおっしゃるはずがない」少年は、何かに憑かれたように、誰に聞かせるとも分らない言葉を寢床の中にくりかえした。

少年を、この深夜まで只ひとり睡らせないのは、ひるま原庭先生がクラスの一同の前でなすつた、一つの奇妙なお話のせいであつた。

では、そのお話とは、どんなものであつたらうか。——

「だからねえ、みなさん」と、原庭先生は目をクシャクシャとさせておっしゃつたのである。それは先生の有名な癖だつた。「世の中に、人間ほど豪いものがないと思つてちや、それは大間違いですよ。この広い宇宙のうちに、何万億の星も漂つているなかで、地球上に住んでいるわれわれ人間が一番賢いのだなんて、どうして云えましようか。人間よりもっと豪い生物が必ずいるに遺いないのです。そういう生物が、いつわれわれの棲んでい

る地球へやって来ないとも限らない。彼らは、その勝れた頭脳でもって、人間たちを立ち廻どころに征服してしまうかもしれない。丁度山の奥に蟻ありの一族が棲んでいて、天下に俺たちぐらい豪いものはなかうと思つていると、そこへ突然狩かりゆうど人が現れ、蟻は愕おどろくひまもなく、人間の足の裏に踏みつけられ、皆死んでしまったなどというのと同じことです。人間もひとりで豪がつていると、今に思いがけなくこの哀あわれな蟻のような愕おどろきにあうことでしょう。みなさん、分りましたか」

教室に並んでいた生徒たちは、ハイ先生、分りましたと手をあげた。敬二も手をあげたことはあげたんだが、彼は先生の話がよくのみこめなかった。ただ彼は、人間よりずっと豪い生物がいる筈だと聞かされて、非常に恐ろしくなった。そしてなんとなく原庭先生が、地球人間ではなく、地球人間より豪い他の天体の生物が、ひそかに原庭先生に化けて教壇の上から敬二たちを睨にらんでいるように思えて、急に身体がガタガタふるえてきたことを覚えていた。

先生のお話になったようなことがあっていいものだろうか。

不思議の音響

敬二少年は、もうすっかり目が冴さえてしまった。寝ていても無駄なことだと思つたので、彼は寢床から起き出して、冷ひえ々びえとした硝子窓ガラスに近づいた。月はいよいよ明あきかに、中ちゆう天てんに光っていた。なぜ月は、あのように薄気味のわるい青い光を出すのだろうか、どう考えたつて、あれは墓場から抜け出して来たような色だ。さもなければ、爬はら虫ゆうるい類の卵のようにも思える。敬二には、今夜の月がいつもとは違つた、たいへん気味のわるいものに思えてくるのだつた。

そのときだつた。

ビビーン。奇妙な音響が敬二の耳をうった。そう大きくない音だが、肉を切るような異い様ように鋭い音だつた。

「今時分、何の音だろう？」硝子窓の方に耳をちかづけてみると、その窓硝子がビビーンと鳴っているのだつた。

なぜ窓硝子は鳴るのだろうか、彼はこれまでにこの窓硝子の鳴つたのを一度も聞いたこと

がなかった。だからたいへん不思議なことだった。だが窓硝子はひとりで鳴るはずがない。必ず何処かに、この窓硝子を鳴らすための力がなければならぬ。その力の元は何であろうか。

「はて、何だろう？」敬二は窓越しに、深夜の地上を見やった。どの建物の屋根も壁も窓も、すっかり熟睡しているように見える。怪しき力の元は、どこにも見当らない——と思つたそのとき、ふと敬二の注意をひくものが……。

「おや、あれは何だろう」それは芒ツと、ほの赤い光であった。二百メートルほど先の、東京ビルの横腹を一面に照らしている一大火光であつた。はじめは火事だろうかと思つた。火事ならたいへんだ。火は一階から四階の間に拵つていゝんだから、だが火事ではない。赤い光ではあるが、ぼんやりした薄い色なんだから。

その大火光は、ときどき息をしていた。ビビーン、ビビーンと窓硝子の音が息をするのと同じ度数で、その大火光もパパーツ、パパーツと息をした。だから敬二は、窓硝子の怪音と東京ビルの横腹を照らす火光とが同じ力の元からでていることを知つた。さあ、こうなるとその火光がどうして見えるんだか、早く知りたくなつた。

敬二は、寝衣を着がえて、早速あの東京ビルの横にとんでいってみようかと思つた。

でも、すぐそうするには及ばなかった。というのは、その怪しき大火光の元が分るような、不思議な怪物が、敬二の視界のなかにお目見得したからである。それは丁度、東京ビルの横に、板いたがこ囲いをされた広い空地あきちの中であつた。そこには黄色くなつた雑草が生えしげつていて、いつもはスポンジ・ボールの野球をやるのに、近所の小供こどもや大供おおどもが使つてゐるところだつた。その平坦へいたんな草原の中央とおぼしきところの土が、どういふわけか分らないが、敬二の見てゐる前で、いきなりムクムクと下から持ちあがつて来たから、さあ大変！ 東京ビルの横腹を染めていた大火光は、その盛りあがつた土塊どかいのなかから、照空しょうくう灯とうのようにパツとさし出ているのであつた。地面の下からムクムクと頭をもちあげてきたものは、一体何だろう。

深夜の探険

敬二はもうじつとして居られなかつた。

「——原庭先生のおつしやったのは、これじやないかなア。人間の知らない変な生物が、地面の下をもぐって出てきたのではなからうか。ウン、そうだ。もっと近くへ行つて、何が出てくるか、よく見てやろう」もう、敬二は怕れ慄えてばかりいなかった。何だか訳のわからぬ不思議なことが始まったと気づいた彼は、その怪奇の正体を一秒でも早くつきとめたいと思う心で一杯だった。

敬二は寝衣をかなぐりすてると、金釦のついた半ズボンの服——それはこの東京ビルの給仕としての制服だった——を素早く着こんだ。そしてつつかけるように編あげ靴を履いて、階段を転がるように下りていった。彼の右手には、用心のたしにと思つて、この夏富士登山をしたとき記念のために買った一本の太い杖が握られていた。敬二が一生懸命にいそいで、例の空地の堀ぎわに駈けつけたときには、空地の草原を下からムクムクと動かしていた怪物は、すでに半分以上も地上に姿を現わしていた。敬二はハアハア息をはずませながら、それを堀の節穴から認めたのである。

「おおッ。あれは何だろう。——」土を跳ねとばして、ムツクリと姿をあらわしたのは、まるで機械水雷のような大きな鋼鉄製の球であった。球の表面は、しきりにキラキラ光っていた。よく見るとそれは怪球の表面がゴム《まり》毯のようにすべすべしていな

いで、まるで鱗うろこを重ねたように、小さい鉄片らしいものに蔽おほわれ、それが息をするようにピクピク動くと、それに月の光が当ってキラキラ閃ひらめくのであった。その怪球はグルグルと、相当の速さで廻っていたが、その上に一つの漂ただよう眼のようなものがあつた。それは人間の目と同じに、思う方向へ動くのであつた。例の薄赤い火光も、その眼のような穴から出ている光だったのである。

「何だろう。あれは機械なのだろうか。それとも生物なのだろうか」片唾かたずをのんでいた敬二少年は、思わずつぶやう呟まいた。全く得態えたいのしれない怪球であつた。鋼鉄ばかりらしく堅く見えるところは機械のようであり、そして蛇の腹のように息をするところは生物のようでもあつた。

さあ、この怪球は、機械か生物か、一体どっちなんだろう？

二つの怪球

怪球は、敬二少年の愕おどろきを余所よそに、ずんずん地面の土下から匍はいあがってきた。ビビビーン、ビビビーンという例の高い音が、鼓膜こまくをつきさすようだった。

「あれッ、あの機械水雷のお化けは、横に転がってゆくよ」敬二が愕おどろきつくすのは、まだ早すぎた。

草原にポカッと明あいた穴の中から、なにかまた、黒い丸い頭がムクムクともちあがってきた。

「おや、まだ何か出てくるぞ」ムクムクムクとせりあがってきたのは、始めの怪球と形も色も同じの双生児ふたごのようなやつぱり大怪球だった。

「呀あッ、二つになった。二つがグルグル廻りだした。ああ、僕は夢を見ているんじゃないだろうな」

夢ではなかった。敬二は自分の頬ほつぺたをギユツとつねってみたが、やつぱり目から涙なみだが滾こぼれおちるほどの痛みを感じたから。

二つの真黒な怪球は、二条の赤い光を宙に交錯こうさくさせつつ、もつれあうようにクルクルと廻りだした。その速いことといったら、だんだんと速さを増して行って、やがて敬二少年のアレヨアレヨと呆れる間もなく、二つの大怪球は煙のように消えてしまった。と同時に

に、照空灯しょうくうとうのように耀かがやいていた赤光も、どこかに見えなくなった。ただあとには、さらに高い怪音が、ビビーン、ビビーンと、微かすかに敬二の耳をうつばかりになった。「あれッ。どうも変だなア。どこへ行っちゃまったんだらう」敬二は二つの黒い大怪球が、宙に消えてゆくのを見ていて、あまりの奇怪さに全身にビツシヨリ汗をかいた。

双生児の怪球はどこへ行った？

敬二は、まるで狐に化ばかされたような気もちになって、掘りあらされた空地あきちの草原をあちこちとキヨロキヨロと眺ながめわたした。

怪球はどこにも見えない。だが、ビビーンと微かすかな怪球の呻うなり声だけは聞える。どこかその辺にいるんだらうが、こつちの目に見えないらしい。

そのときであった。カリカリカリという木をひき裂くような音が聞えだした。鋭い連続音である。

「さあ何か始まったぞ」敬二はその異変を早く見つけたいと思つて目を皿のようにして方々を眺めた。遂ついに彼は発見したのである。

「あッ、あそこの板いた堀べいが……」板堀に、今しもポカリと穴が明いている。フットボールぐらいの大きさだ。その穴が、どうしたというのだらう、見る見るうちに大きく拡がって

ゆくのである。やがてマンホールぐらいの大きさの穴になり、それからまだ大きくなつて自動車のタイヤぐらいの大きな穴となつた。しかし何が穴を明けているのか更に見えない。怪奇は、まだ続いた。板塀の穴がもう大きくならぬと思つたら、こんどはまた別の大きな音響が聞えだした。カチカチカチツツという硬いものをぶつとばす音だ。その音は、ずつと手近に聞える。敬二はハツとして、後をふりかへつた。

ところがどうであろう、彼はいとも恐ろしきことが、すぐ後に始まっているのを知らなかつたのだ。敬二の顔は真^ま青^{あお}になつた。そして思わずその場に尻餅^{しりもち}をついてしまった。ああ彼は、そこにいかに愕^{おどろ}くべき、そして恐るべきものを見たのだろうか。

この深夜の怪奇を生む魔物の正体は何？

崩れる東京ビル

敬二少年は、石を積みかさねてつくられたビルディングが、溶^とけるように消えてゆく

を見た。——なんとという怪奇であろう。

「……」敬二少年は、愕きのあまり、叫び声さえも咽喉をとおらない。

彼が見た光景を、もつとくわしくいうと、こうである。——

彼は、東京ビルを背にして立つていたのであった。ところがうしろにカチカチカチツと硬いものをはげしく叩くような音がしたので、うしろをふりかえってみると、さあ何ということであろう。東京ビルの入口に立っている太い柱の一本が、下の方からだんだん抉られてくるのであった。柱はみるみる抉られてしまつて、メリメリと、大きな音をたててゴトンと下に落ちた。そして中心を失つて、スーツと横に傾くと、地響をたてて地上に仆れ、ポーンと粉々にこわれてしまつた。

敬二少年は、わずかに身をかわしたので、幸うじてその柱の下敷きになることから救われた。

カチカチカチツ。——また怪音がする。

「おやツ——」と、音のする方をふりかえつた少年の目に、また大変な光景が目につつた。

それは、東京ビルの玄関が、下の方からズンズン抉られてゆくことであつた。まるで砂

糖で作った菓子を下の方から何者かが喰べでもしているように見えた。堅^{けんろう}牢なコンクリートの壁が、みるみる消えてゆく。そのうちにガラガラと音がして、ぶったおれた。

「ややッ、これは……」寝坊^{ねぼう}の宿直^{しゆくちよく}が、やつと目をさまして、とびだしてきた。彼はあまりのことに、まだ夢でもみている気で、目をこすっていた。

警官が駈^かけつけてきた。

通りがかりの酔^よっ払い^{ばらい}が、酔いもさめきつた青い顔をして、次第に崩れゆく東京ビルを呆然^{ぼうぜん}と見守っていた。警官にも、何事が起っているのか、ハッキリしなかったが、ただハッキリしているのは見る見るうちに東京ビルが崩れてゆくという奇怪な出来ごとだった。火災報知器が鳴らされた。ものすごい物音に起きてきた野次馬の一人が、気をきかしたつもりで、その釦^{ボタン}を押したのだろう。

その騒ぎのうちに、ビルディングはすこしずつ崩れていって、やがて大音響をたてると、月明^{げつめい}の夜が、一瞬に真暗になるほど恐ろしい砂煙をあげてその場に崩潰^{ほうかい}してしまった。まるで爆撃されたような惨澹^{さんたん}たる光景であった。

「一体、これはどうしたというわけだ」と、駈^かけつけた人々は叫んだ。

「まさか白蟻^ががセメントを喰べやしまいし、ハテどうも合点のゆかぬことだ」

誰も、この東京ビル崩壊事件の真相を知っている者はなかった。まるで夢のような、銀座裏の怪奇事件であった。

蟹寺博士の鑑定

東京ビルの崩壊は、崩れおちるまでに相当時間が懸ったので、幸いにも人間には死傷がなかった。警視庁からは、水久保捜査係長が主任となって、この原因の知れないビルの崩壊事件を調べることになった。

「どうも分らない。殺人事件の犯人を捜す方がよつぽど楽だ」と、智慧の神様といわれている水久保係長も、あつけなく胃かぶとをぬいってしまった。

山ノ内総監も「分らない」という報告を聞いて不興ふきようげな顔をしてみせたが、さりとしてこれがどうなるものでもなかった。

「水久保君。分らないというだけでは、帝都三百万の市民にたいして、申もうしわけ訳わけにならな

いぞ。分らないにしても、もつと何か方法がありそうなものじやないか。こんな風にしてみれば或いは分るかもしれない、といった何か思いつきはないかネ」

「そうでございますネ」と水久保係長はしきりに頭をひねっていたが、急に思いついたという風に手をうって「そうだ。これは一つQ大学の変わり者博士といわれている蟹寺先生に鑑定をねがってみてはどうでしょう」

「おお、蟹寺博士か。なるほど、そいつはいい思いつきだ。先生は非常な物識りだから、きつとこの不思議をといて下さるだろう。ではすぐ博士に電話をかけて、おいでを願おう」
山ノ内総監も、急に元気づいて、水久保係長の言葉に賛成したのだった。

それから一時間ほどして、いよいよ博士が東京ビルの崩れおちた前にあらわれた。博士は強い近眼鏡をかけて、鼻の下から頤へかけてモジャモジャ髯を生やしていた。

「なるほど話に聞いたよりひどい光景じゃ」と博士は目をみはりながら、崩れたビルの土塊を手にとりあげたりしていたが「これはなかなか強い道具で壊したと見える」

「先生、強い道具でとおっしゃっても、それを見ていた人間の話によると、道具はおろか、現場には犬一匹いかなかったそうです」

「何をいうのだ。儂のいうことに間違いはないのじや。たしかに強い道具で、これを壊し

たにちがいない。やがてそれがハッキリするときが来るにきまっている」

「そうですかねえ。だがどうも変だなア。見ていた連中は、誰も彼も、いいあわしたように、かたわら傍には何にも見えないのに、ビルだけがボロボロ壊れていったといっているんだが…

…

水久保係長には、博士のいうことがよく嘘のみこめなかった。

しばらくすると博士は、腰をのばして、

「この現場は、まあこれくらいで分ったようなものじゃ。では、今盛んに崩れているところを見たいから、案内して下さらんか」

「今崩れているところ？」係長は側をむいて警官隊に、今崩れているところがあるかどうかたずねた。

「さあ、只今そういうところはありません。今のところ、東京ビルだけで崩れるのは停つたようです」蟹寺博士はそれを聞いていたが、やがて首を大きく左右にふつていった。

「この事件は、崩れているところを見ないことには、なぜそんなことが起るか説明できないでしょう。こんどそういうことがあったら、急いで知らせして下さいよ」博士は、そういすててスタコラ帰っていった。

新聞記事

敬二少年は、その夜の異変を思いだしてはゾツとするのだった。

——空地の草原を上へおしあげてムクムクと現れた機械水雷のような大怪球！ しかも一つならず二つも現れた。それがビビーンビビーンと互いにグルグル廻りながら、やがて煙のように消えてしまった。その怪球には、眼玉のような赤い光の窓がついていたが、それも見えなくなった。二つの大怪球はどこへ行ったのだろうか。

——東京ビルがカチカチカチツと崩れはじめたのは、それから間もなくのことだった。

——赤い眼をもった二つの大怪球と、東京ビルの崩壊とは、別々の異変なのであろうか。それともこの二つは同じ異変から出ているのであろうか。

翌日の朝刊新聞には、東京ビルの崩壊事件が三段ぬきの大記事となって、デカデカに書きたてられていた。

「深夜の怪奇！ 東京ビルの崩壊！ 解けないその原因！」という標題があるかと思うと、他の新聞にはまた、「科学的怪談！ 蟹寺博士もついに匙を投げる。人類科学力の敗北！」

などと、大々的な文字がならべてあった。

敬二少年は、東京ビルの崩れた前でその新聞を一つのこらず読みあさった。しかしその新聞記事のどこにも、例の二つの大怪球のことは出ていなかった。敬二少年は不思議でならなかった。なぜあのことを書かないのだろうか。

「オイ給仕、この騒ぎのなかで、新聞なんか読んでいちゃいけないじゃないか。そんな違があつたら、壊れた壁を一つでも取りのけるがいい」

喧し屋の支配人足立は、敬二少年を見つけて、名物の雷を一発おとした。

「ははッ——」と、敬二は鼠のように逃げだしてビルの崩れた土塊の上によじあがった。

「敬坊、てへッ、やられたじゃねえか。ふふふッ」

「なんだ、ドン助か。こんなところにいたのか」

「ふふふッ。さつきから、ここで働いているんだ。もう大分掘ったよ」そういったのは、同じ東京ビルのコックをしていたドン助こと永田純助という敬二の仲よしだった。彼

はおそろしく身体の大きなデブちゃんであった。

「ずいぶんよく働くネ。いつものドン助みたいじゃないや」

「ふん、これは内緒だがナ、この真下ましたに、おれの作っておいた別製の林檎りんごパイがあるんだ。腹が減ったから、そいつを掘り出して喰べようというわけだ。お前も手伝ってくれば、一切れ呉くれてやるよ」

怪しき盗聴者

「泥まみれのパイなんか、僕は好きじゃないんだよ。ねえドン助さん。それよか、もっと重大なことがあるんだ」

「重大？ 重大だなんて、心臓の弱いおれを愕おどろかすなよ。重大てえのは何事だ」

「うん、それはネ——」と敬二少年は、昨夜この東京ビルの崩壊したことは新聞に書いてあるが、彼がそのすこし前に見た二つの大怪球のことについては、何も記事が出ていない

のはなぜだろうと、昨夜の愕くべき光景をくわしくドン助に話をしたのだった。

「ははア、そういうことなら分ったよ。つまりそのグルグル鬼ごっこをする大怪球——どうも大怪球なんて云いにくい言葉だね、マルマルじゆう〇〇獣といおうじゃないか。——その〇〇獣

を見たのは、お前一人なんだ。新聞記者も知らないんだ。もちろん何とかいった鬚博士ひげはかせも知らないんだ。これはつまり特ダネ記事になるよ。特ダネは売れるんだ。よおし、おれにまか委せろよ。〇〇獣の特ダネを何処どこかの新聞記者に売りつけて、お金かね儲けもうをしようや」

「特ダネで、そんなに売れるものかい」

「うん、きつと売って見せるよ」そういつているときだった。

「その特ダネ、ワタクシ、貫います。お金、たくさんあげます」と、突然二人のうしろに声が出た。

ハツと敬二とドン助が顔をあげてみると、そこには見慣れない若い西洋人の女が立っていた。背はそれほど高くはないが、とびいろ鳶色の縮れた毛髪をもち、顔は林檎のように赤く、そして男が着るようなかいはくしよく灰白色のバーバリ・コートを着てあご頤を襟深く隠していた。そして眼には、大きな黒い眼鏡をかけ、いままで崩れた土塊をおこしていたらしく、右手には長い金属製の尖り杖とんがづえをもっていた。

「えッ、あなたが買うんですか」

「買います。これだけお金、あげます。ではワタクシ買いましたよ。外の^{ほか}の人に話すこと、なりません。きつと話すことなりません」

そういつて、ドン助の手に素早^{すばや}く握^{にぎ}らせた紙幣——^{てのひら}掌をあけると、十円札が二枚入つていた。

「ほほう、二十円——」

「ドン助さん。これ偽^にせ札^{じつ}じゃないのかい」

ドン助は偽^にせ札と聞いて、天の方にすかしてみたが、やがてかぶりをふつて、その一枚を敬二の懷中にねじこんだ。

怪しき黒眼鏡の外国婦人は何者だろう？

蟹寺博士は、この大秘密をうまく解くことができるだろうか。

それに〇〇獣は、今どこへ隠れてしまったんだろうか。そも〇〇獣とは何ものだろう。

また新聞記事

あの不思議な マルマルじゆう 〇〇獸は、一体どこへ行ってしまったんだろう。

それからまた、硬いコンクリートや鉄の柱がはげしい音をたてて消えてゆくビルディングの奇病は、その後どうなったんであろうか。

敬二少年は、思いがけなく十円紙幣が懐 ふところ 中に転がりこんだので、彼はしばし夢ごちであつたが、いくど懐中から出して改めてみても、十円紙幣はいつも十円紙幣に見えた。化け狸 たぬき がくれた紙幣ならもうこのへんで木の葉 は になつていいころだったが、そうならないところを考えると、なるほどやはり本当に十円儲 もう かつたのだと分つた。

そうなると敬二は、この十円をどういう具合につかつたらいいのだろうか、また考えこまなければならなかつた。

いろいろ考えた末、彼はいいことを考えついた。それはカメラを手に入れることだつた。カメラを手に入れるといつても、十円のカメラを買つたのでは、みすぼらしい器械しか手に入らない。それではつまらぬと思つたので、たいへん考えた末、ちかごろ高級カメラとして名のあるライカを借りることにした。ライカを一週間借りて そんりよう 損料 十円——という

ことにきまつた。この店は、敬二がよく使いにゆく店だったので、店でもたいへん便宜をはかつてくれて、十円の損料だけでよいということだった。

敬二はすっかり嬉しくなつて、速写ケースに入つたライカを首にかけて離さなかつた。使いにゆくときも、食事をするときも寝るときも、彼はカメラを首にかけていた。カメラを離しているのは、お風呂に入るときだけだった。彼はこの一週間のうちに、十円以上の値打のあるなにか素晴らしい写真をとりたいたいものと、それをのみ念じていた。

ドン助はどうしたのか、さつぱり姿を見せなかつた。

十円儲かつたその次の日の朝のことだった。配達された朝刊を見て、敬二は目を丸くして愕いた。

社会面のトップへもつて来て、三段ぬきのデカデカ活字で〇〇獣のことがでていたのである。

——ビル崩壊の謎はこれか？　〇〇獣を見た東京ビル主任永田純助氏語る——

という標題で、「私は昨夜この眼で不思議なけどもの〇〇獣を見ました。これは雪達磨を十個合わせたぐらいの丸い大きな目をもつた恐ろしい怪物です。そいつは空からフワリフワリと下りて来て、私を睨みつけたのです。私は日本男子ですから、勇敢にも〇

〇獣を睨みかえしてやりましたが、その〇〇獣の身体というのは、狐のように胴中どうなかが細く、そして長い尻尾しっぽを持っていて、身体の全長は五十メートルぐらいもありました。しかし不思議なのはその身体です。これはまるで水母くらげのように透きとおっていて、よほど傍へよらないと見えません。とにかく恐ろしい獣けだもので、私の考えでは、あれはフライにして喰べるのがいちばんおいしだろうと思いました。云々」

敬二はそこまで読むと、ドン助の大法螺おおぼらにブツとふきだした。ドン助はいうことが無いのに困って、こんな出鱈目でたらめをいつたのだろうが、フライにして喰べるといいなどはコツクだというお里を丸だしにしていって笑わせる。

ローラ嬢の立腹

その日、お昼が近くなつたというのに、ドン助が帰ってこないで、足立支配人はプンの大プリプリに怒っていた。

「こら給仕お前は永田の居所いどころを知っているくせに、俺にかくしているのだろう。早くつれてこい。もう三十分のうちにつれてこないと、お前の首をとってしまふぞ。あいつにはウンといつてやらんけりやならん。俺という支配人が居るのに、東京ビルの主任だなんて新聞にいいやがって、怪けしからん奴だ」

プリプリと足立支配人は怒りながら、向うへいつてしまった。日ごろ怒るのが商売の支配人ながら、今日は本当に足の裏から頭のとつぺんまで本当に怒っているらしかった。

「困ったなあ、ドン助のおかげで、僕まで叱しかられて、ああつまんないな」

敬二は、腹だちまぎれに向うへ帰つてゆく支配人の後姿にカメラを向けて、パチリと一枚写真をとつた。機関銃でタタタタとやったように。いい気持になった。これで支配人の禿げ頭がキラキラと光つているところがうつつてもいれば、もっと胸がスーツとすくだるうに。

敬二は、壊れた石塊いしころの上に腰を下ろして、ドン助がどこへいったのだろうかど、心あたりを一つ一つ数えはじめた。

「あ、あなたです。ワタクシ、よく覚えています——」

物思いにふけていた敬二は、いきなり黄いろい女の金切り声かなきとともに、腕をムズとつ

かまれた。

顔をあげてみると、それは十円紙幣をくれたとびいろ鳶色のちぢれ毛の外国婦人だった。やっぱり大きい黒眼鏡をかけて、白っぽいコートをひきずるようきていた。

「この間は、どうも有難う」と、敬二はお礼をのべた。

「あなた、ひどい人ありますね。なぜ約束、破りました」

「えッ、約束なんて——」

「破りました。ニユースを二十円で、ワタクシ買いました。外ほかの人にきつと話すことなりません、約束しました。ところが今日の新聞、みな〇〇獣のこと書いています。大々的に書いています。それでもあなた大嘘つきありませんか」

「ま、待つて下さい。ぼ、僕はなにも知らないのです。喋しゃべったとすれば、ドン助が喋ったのかもしれない。僕は喋らない」

「ドン助？ ああ、あの太った人ですね。ドン助どこにいます。ワタクシ会います。彼にきびしく云うことがあります。すぐつれて来てください」

「ドン助ですか。わーッ」またドン助だ。ドン助は一体どこに行ってしまったんだらう。敬二はローラというその外国婦人の前を逃げるようにしてすりぬけた。ローラは拳こぶしをふり

あげながら、あとから追いかけてくる。捉つかってはたいへんと、敬二は、ビルの裏へにげこんだ。

でもローラの金切り声はおいかけてくる。

さあ、そうなるかと逃げるところがなくなつた。といつて捉つかってはどんな目にあうかもしれない。そのとき敬二はいい隠れ場所をみつけた。それは外国人がホテルへついて荷物を大きな荷造りの箱から出したその空箱あきばこがいくつも重ねてある場所であつた。敬二はそのうちで一番大きい箱に見当をつけて、腕をすりむくのも構かまわず、夢中になつて空箱のなかにとびこんだ。

そのとき彼は、箱の奥に、なんだかグニヤリとするものにつきあたつてハツとした。

ドン助の行方

空き箱の奥のグニヤリとするものにつきあたつて、敬二少年は心臓がつぶれるほどおど

ろいた。何だろうと思つて目をみはつたとき「ゴーツ」という音が耳に入った。大きな鼾いびきであつた。

「なんだ、こんなところに寝ているんだもの、どこを探したつて分る筈がない」空き箱の中に窮きゆうくつ屈くつそうに、身体を、縮めて寝こんでいるのは、行方不明になつたドン助だつた。酒にの香においが箱のなかにプンプンにおつていた。

敬二はドン助をそつと揺りおこした。ところがそんなことで目のさめるような御当人ごとうじんではなかつた。といつて箱のなかであるから、あまり音をたてては、ローラに知れる。そこで一策いっさくをかんがえて、ドン助のはりきつた太ももをギューツとつねつてやつた。

「ああ、あいてて……」膨ふくれかけた鼻提灯はなちようちんが、急にひつこんで、その代りドン助はバネ人形のように起きあがつた。そこは狭せまい狭い箱の中だつた。彼はいやというほど頭をぶつつけて、とうとう本当に眼をさました。

「やつ、貴様か。貴様はなんというひどい——」大口おおぐち開いてつかみかかつてくるドン助を、敬二はあわててつきとばした。ドン助は赤ん坊のように、どたんと倒れた。

敬二が早口はやぐちに、あの黒眼鏡のローラがいまそこまで追っかけてきていることを告げると、さすがのドン助もこれが大いに効きいたと見え、彼はたちまち頭をかかえて羊のごとく

おとなしくなつてしまった。

「そうか。そいつは弱つたな」

敬二はこれまでの話を、手みじかに話してやつた。それを聞いていたドン助は、

「いや、俺が慾ばりすぎて失敗したんだ。でもあの外国の女には第一番に話をしたんだから、あれは二十円の値打はあると思うよ。第二番以後は二円ずつ安くして、ニユースを売つてやつたのだ。あれから皆で四、五十円も儲かつたよ。だからつい呑みすぎちまつたんだ。わるく思うなよ」あの出鱈目ニユースを、そんなに幾軒もの新聞に売つたと聞いて、敬二はドン助の心臓のつよさにおどろいた。

「へへえ、支配人が俺をとつちめるといつてたかい。そいつは困つたな。あいつは柔道四段のゴロツキあがりだから、いま見つかりや肋骨ろっこつの一本二本は折られると覚悟しなきやならない。そいつは痛いし——」と腕をこまねいて、

「どうも弱つた。仕方がない。夜になるまでここに隠れていよう」ドン助はごろりと音をたてて横になつた。すると間もなく平和な鼾が聞えてきた。すっかりアルコールの擒とりことなつた彼の身体は、まだまだねむりをとらなければ足りないのであつた。

マルマルじゆう
〇〇獣の再来

恐ろしいビルディング崩壊が再び始まったのはその日の午後であった。

あれよあれよと見る間に、例のかりかりという怪音をあげて、東京ホテルの裏に立っている大きな自動車のガレージを囓りはじめた。

敬二少年が外に走りだしたときは、もはやガレージの横の壁が、まるで達磨を横にしたように囓みとられ、そして中にある修理中の自動車ガリガリやられているところだった。じつと見ていると、それらの壁や自動車が、音をたてて自然に消えてゆくとしか見えないのであった。もちろんドン助が新聞記者に喋ったように、怪物の尻尾もなんにも見えなかった。

敬二はいまさらながら、この出来事を眼の前に見て、気味が変わるかったが、思いついて、首にかけていたカメラでパチリと写真を一枚とった。露出はわずか千分の一秒という非常に短かい撮影だった。

「やあ、これかい。なるほどなるほど」と突然大きな声がしたので、その方をふりむいてみると、誰がいつの間知らせたのか、蟹寺博士が来ていた。博士は例の強い近眼鏡を光らせて、崩壊してゆく自動車を熱心にじつと見つめていた。

自動車も消えてしまうと、そこらに集って見物していた人達は、にわかには狼^{ろうばい}狼^{ばい}をはじめめた。さあ、こんどはどこが崩壊するかしれないからです。もし自分の身体が崩壊しはじめたらどうしよう。

カリカリカリカリ。

突然また例の怪音がおこって、人々の耳をうった。

カメラの手柄

敬二少年が、わずか千分の一秒という短かい露出でもって、○○獣の動いていると思われるところをうまく写真にとったことは、前にいった。少年は、どんな写真が撮^とれたかを

一刻も早く見たくてたまらなかつた。それで目下、東京ホテルの裏口を暴れまわっている
〇〇獣のことは、折から現場に着き例の強い近眼鏡をひからせながら熱心に観察している
蟹寺博士にまかせてしまつて、敬二はカメラをもつたまま、友だちの三ちゃんというのが
やつている写真機屋の店をさして駈けだした。

「おう、三ちゃん、たいへんだたいへんだ」

「な、なんだ。おや敬ちゃんじゃないか。顔いろをかえてどうしたんだ」三ちゃんは現
像室からとびだしてきて、敬二少年を呆れ顔で見やつた。

「うん、全くだいへんなんだよ。〇〇獣の写真をとつてきたんだ。すまないが、すぐ現像
してくれないか」

「えつ、なんだつて、あの〇〇獣の写真をとつてきたんだつて。まさかね。あははは」と、
三ちゃんは本気にしない。それもそうであろう。誰にも見えない〇〇獣が写真にうつるわ
げがないからである。敬二少年は、それからいろいろと説明をして、やつと三ちゃんに納
得してもらふことができた。

「ああそうだったのか。千分の一秒で……。うむ、これなら或いはなにか見えるかもしれ
ないね。ではすぐ現像してみよう」そういつて三ちゃんは、敬二のフィルムをもって、現

像室にもぐりこんだ。

それから二、三十分も経つたと思われころ、三ちゃんは水すいせん洗平皿ひらざらに、黒く現像のできたフィルムを浮かして現れた。

「おい三ちゃん、どうだったい」

「うん。なんだかしらないけれど、とにかく妙なものがぼんやり出ているようだぜ。いまそれを見せてやるから、待っていなよ」そういつて三ちゃんは、水に浮いているフィルムを、そつと水中でひっぱつてみせた。

「ほら、ここんところを見てごらん。なんだか白い環わのようなものが、ぼんやりと見えるだろう。これはたしかに〇〇獣らしいぜ」

フィルムのままでは、白と黒とがあべこべになっているので写真を見つけない敬二にはよく見えなかった。そこで三ちゃんは、水洗をいい加減にして急に乾かすと、それを印画いんわ紙がしにやきつけた。すると肉眼で見ていると同じ光景が、写真の面にあらわれた。

「ああつ、これだ。この輪が〇〇獣なのだ」

それは崩壊してゆくガレージの壁をとつた写真だったが、その壊れゆく壁かべ土つちのそばになんと奇妙な二つの輪がうつつていた。かなり太い環であった。それは丁度噛みあつた

指環のようなかっこう恰好をしていた。どうして○○獸は、こんな形をしているのだろうか。

○○獸の謎

敬二少年は、ついに○○獸の撮影に成功したのだった。

この写真をよく見てるうちに、彼はこの事件が起った最初、裏の広場の土をもちあげて、機械水雷のような形をした二つの球きゅうかい塊がむつくり現れたことを思いだした。

○○獸の正体は、やはりこれだったのである。

何だかしらないが、その二つの球塊が、たがいにくるくると廻りあっている。一方が水平に円運動をすると、他の方は垂直に円運動をする。つまり二つの指環を噛みあわせたような恰好の運動になるのであった。それは二つの球が、お互いに運動をたすけあつて、いつまでもぐるぐる廻っていることになるのであった。○○獸のおそろしい力も、こうした運動をやっているからこそ、起るのであった。

今では○○獣の姿が、一向人々の眼に見えないが、これは○○獣がたいへん速く廻転しているせいであった。たとえば非常に速く廻っている車が見えないのと同じわけであった。敬二少年は、○○獣がこれから廻ろうとしていたその最初から見えていたのであった。「まったく不思議な○○獣だ」と、敬二は自分で撮った写真をじっと見つめながら、長ちよう大息たいそくをした。

○○獣というのは、二つの大きな球塊がぐるぐる廻っているものだということは分つたけれど、さてその大きな球塊は一体どんなものから出来ているのか、また中には何が入っているのかということについては、まだ何にも知れていなかった。そこに実に大きい疑問と驚異きやういとがあるわけであったが、敬二には何にも分っていない。いや敬二ばかりが分らないのではない。おそらく世間の誰にもこの不思議な○○獣の正体は見当がつかないであろう。

敬二が○○獣の写真をもつて、再び東京ホテルの裏口に帰ってきたときには、そこには物見高い群衆が十倍にも殖ふえていた。その間を押しわけて前に出てみると、ホテルの建物はひどく傾かたむき、今にも転覆てんぷくしそうに見えていた。その前に、蟹寺博士が、まるで生き残りの勇士ゆうしのように只一人、凜然りんぜんとつつ立っていた。警官隊や消防隊は、はるかに離れて、

これを遠巻とちまきにしていた。

そのとき敬二は、胸をつかれたようにはつと感じた。それは外ほかでもない。ホテルの裏口に積んであった空箱あきばこの山が崩れて、そのあたりは雪がふつたように真白に、木屑きくずが飛んでいることであつた。

「ドン助は、どうしたろう。この空箱の中に酔っぱらって眠っていたわけだが……」

彼は急に心配になつて、恐ろしいのも忘れて前にとびだした。そして残つた空き箱の一つ一つを手あたり次第にひっくりかえしてみたが、たずねるドン助の姿はどこにも見あたらなかつた。ぞーツとする不吉な予感が、敬二の背すじに匍はいあがってきた。

再びドン助の行方

「おいおい、君は何をしとるのか。こんなところにいると危あいじやないか」

と、蟹寺博士がつかつかと敬二のところへやってきた。

「ああ博士せんせい。僕はドン助を探しているのです」

「ドン助？ はて、そのドン助というのは、誰のことじゃ」

「ドン助というのは、僕の親友ですよ。コックなんです。すっかり酔よつぱら払はらって、ここに積んであった空箱のなかに寝ていたはずなんですけどね」

「なに、この空箱のなかに寝ていたというのかね」博士は目をぱちくりして「そしてドン助は見つかったかね」

「だから今も云つたとおり、そのドン助を探しているのですよ。ところがどこにも見つからないんです」

「ふむ、そうか」と博士は腕ぐみをして考えていたが、

「これはひよつとすると、たいへんなことになったかもしれないぞ」

「えッ、たいへんとは何です。早くいつて下さい」

「実はな、さつき〇〇獣が、この空箱の山をカリカリ音をさせて喰いあらしたのじゃ。空箱はつきからつきへと下へ崩れおちてくる。そこをカリカリカリと〇〇獣は喰いつづけたのじゃ。ひよつとすると、そのドン助というのは、そのときこの〇〇獣に喰われてしまったかもしれないよ」

「ええつ、ドン助が〇〇獣に喰べられてしまいましたか」

それを聞くと、敬二は頭がぼーつとしてきた。人もあろうに、ドン助が〇〇獣に喰われてしまうなんて、なんとということだろう。ドン助は喰われてしまって、どうなったであろうか。

「博士^{せんせい}、〇〇獣に喰べられて、どうなっちゃったんでしようか」

「さあ、そこがどうも分らるので、いま研究中なのじゃ」

敬二は思いついて、博士に〇〇獣の写真を出してみせた。こいつは博士を興奮させたこと、非常なものであった。

「おお、これじゃ、これじゃ。儂^{わし}の想像していたとおりじゃった。二つの球体が互いにぐるぐる廻っているのがよく分る。はて、こういうわけなら、〇〇獣を生擒^{いけとり}に出来ないこともないぞ」

「〇〇獣を生擒にするんですか」

敬二は我^{われ}をわすれて躍りあがった。〇〇獣の生擒なんて、いまのいままで考えていなかったことだ。もし生擒にできたなら、〇〇獣の謎の正体もはつきり分るだろう。

二人が〇〇獣の生擒の話で夢中になっているとき、二人の傍には、いつ何処から現れた

かしないが、例の黒眼鏡の断髪だんぱつの外国婦人が忍びよって、そこらに散らかっている雪のように白い木屑を、せつせと掃きあつめてはメリケン粉袋にぎゅうぎゅうつめこんでいた。

おとしあな
陥 穽

「おーい！ 消防隊」

蟹寺博士は、すこぶる興奮のありさまで、向うに陣をしいている消防隊の方へ駆けだした。そして隊長らしいのをつかまえて、しきりに手真似入りで話をやっているのが見えた。すると消防隊は、にわかかっぱつに活澆かっぱつになった。大勢の隊員が、さらに呼びあつめられた。

「一体なにが始まるのかしら」敬二はそれが知りたくて仕方しかたがなかった。それで傍へ近づいていった。

蟹寺博士は、地面に図を描いて、消防隊長に説明をしていた。

「いいかね。このとおりやつてくれたまえ」

「ずいぶん大きな穴ですね。もつと人数を増まさなきや駄目です」

と、隊長の一人がいった。

「要ると思うのなら、すぐ手配をして集めてきたまえ。〇〇獣の生いけどり擒とがうまくゆかなければ、この事件の被害はますます大変なことになるのだ。井戸掘機械なりとなんなりと、

要ると思うものはすぐ集めてきて、早くこのとおりの穴を掘ってくれたまえ」

蟹寺博士は気が気でないという風に、消防隊を激げき励れいした。

その甲斐があつてか、まもなく東京ホテルを中心として、その周囲に深い穴がいくつとなく掘られていった。

「博士せんせい。こんなに穴をあけてどうするんですか」

「おう、敬二君か。これは陥おとし窞あななんだよ。〇〇獣をこの穴の中におとしこむんだよ」

「へえ、陥窞ですか。なるほど、ホテルの周囲にうんと穴を掘って置けば、どの穴かに〇〇獣が墜落するというわけなんですね」

「そのとおりそのとおり」

「博士せんせい、穴の中に落っこつただけでは駄目じゃありませんか。なぜって、穴の中で〇〇

獣が暴れば、穴がますます大きくなり、やがて東京市の地底しぞこに大穴おおあなが出来るだけのことじゃないんですか」

「うん、まあ見ていたまえ。儂わしの胸にはちやんと生擒りの手が考えてある」蟹寺博士は、大いに自信のある顔つきであった。

そのうちに穴はどんどん掘りさげられていった。千五百人の人が働いて、五十六の大穴が掘れた。もうあとは、○○獣が外へ出てきて、あとしあな陥穴おちいにおちるばかりであった。蟹寺博士ははじめ大勢の見物人は、それがいつ始まるだろうかと、首を長くして○○獣の出てくるのを待ちわびた。

「おお、あそこから○○獣が出てきたっ！」敬二が突然大きな声で叫んで、ホテルの南側の窓下ゆびさを指した。

女流記者

敬二の指した方を、大勢の人々は見てはつとした。

今やホテルの南側の窓下が、がりがりごりごりと盛んに囁かれてゆき、見る見る大きな穴が明いてゆく。

「うわーッ、あれが〇〇獣だ」

「危いぞ。皆下がれ下がれ」

見物人は顔色をかえて、後へ尻込みをするのだった。

勇敢なのは、蟹寺博士だった。

博士はその前に、前かがみになって、じつと見つめている。

そのとき、敬二少年はドン助の行方が気になるので、しきりにそのあたりを探しまわつてたが、何処を探してみてもいない。博士はドン助が木函ごと〇〇獣に囁られてしまったといったが、始めはそれが冗談と思っていたのに、だんだん冗談ではないことが敬二に分ってきた。

「もし、貴女はなぜその木屑をメリケン袋の中にぎゅうぎゅうつめこんでいるんですか」と、黒眼鏡の外国婦人に声をかけた。

すると、かの外国婦人は、怒ったような顔を敬二の方に向けると、

「あなた、分りませんか。この木屑の中に、あなたの友達の身体が粉々になってありますのです。おお、可哀かわいそうな人であります。わたくし、こうして置いて、後で手篤てあつく葬ほうむつてやります。たいへんたいへん、気の毒な人です。みな、あの〇〇獣のせいです」

「すると、ドン助は〇〇獣に殺されて、身体はこの木屑と一緒に粉々になっているというのですか。本当ですか、それは——」

「本当です。わたくし、あなたたちのように嘘つきません」

「僕だつて嘘なんかつきやしない」

と、敬二少年は腹を立ててみたが、とにかくもしそれが本当だとすると、この外国婦人は親切なひとだと思われる。

「貴女は一体どういう身分の方なんでしょうか」

と、敬二は彼女に聞きたいと思つていたことを訊たずねてみた。

「わたくしはメアリー・クリスという英国人です。タイムスという新聞社の特派員です。

この〇〇獣の事件なかなか面白い、わたくし、本国へ通信をどんどん送っています。いや本国だけではない、世界中へ送っています」

「ははあ、女流新聞記者なのですか」

敬二は始めて合点がてんがいったという顔をした。

○○獸 生擒いけどり

そのとき、大勢の群衆がうわーつと鬨ときの声をあげた。

「騒さわぐな騒さわぐな」

と、蟹寺博士は群衆を一生懸命に制しているが、なかなか鎮しずまらない。

「さあ、セメントを入れろ！」

消防隊員は総出そうででもって、穴の中にしきりにセメントの溶かしたものを注つぎいれている。もちろんそれは蟹寺博士の指図さしずによるものであった。

「どうしたんです」

と、敬二が見物人に聞くと、

「いや、とうとう○○獸が穴の中に墜おちたんだとよ」

「えつ、○○獸が……」

敬二が愕おどろいているうちにも、セメントは後から後へと流しこまれる。しかしそのたびに穴の中から真白な霧みたいなのがまい上つてくる。

セメントはどんどん、穴の中に注がれた。

敬二は心配になって、蟹寺博士のそばに駆けだしていった。

「博士せんせい。○○獸が墜おちつこつたつて本当ですか」

「おお敬二君か。本当だとも」

「穴の中へセメントを入れてどうするんですか」

「これか。これはつまり、○○獸をセメントで固かためて、動けないようにするためじゃ」

「なるほど——」

敬二には、始めて合点がついた。○○獸はもともと二つの大きな球が、たいへん速いスピードでぐるぐる廻まわっているものだった。そのままでは人間の眼にも停とまらないのだった。その廻転を停めるためには、セメントで○○獸を固めてしまえばいい理窟りくつだった。な

るほど蟹寺博士は豪えらい学者だと敬二は舌をまいて感心した。しかしそのとき不ふ図と不ふ審しんに思ったのは、セメントは乾かわくまでになかなか時間が懸かるとい

うことだ。ぐずぐずしていれば、〇〇獣はまた穴のなかからとびだして来はしまいか。そう思ったので、敬二は心配のあまり蟹寺博士にたずねた。

すると博士は、眼鏡の奥から目玉をぎよりと光らせて云った。

「なあに大丈夫だとも。今穴の中に流し込んでいるセメントは、普通のセメントではないのだ。永くとも一時間あれば、すっかり硬くなってしまふセメントなんだよ。そのセメントのなかで〇〇獣は暴れているから、摩擦熱まさつねつのため、セメントは一時間も罹かからないうちに固まつてしまふだろう」

なるほどそういうものかと敬二は、また感心した。

「そんなセメントがあるのは知らなかった。これも博士の発明品のですか」

「そうじゃない。この早乾はやかわきのセメントは前からあるものだよ。歯医者へ行つたことがあるかね。歯医者がむし歯につめてくれるセメントは五、六分もあれば乾くじゃないか。一時間で乾くセメントなんて、まだまだ乾きが遅い方なんだよ」

あつそうか。むし歯のセメントのことなら、敬二もよく知っていた。じゃあ〇〇獣は、そろそろセメント詰めになる頃だぞ。

だいちんじ
大椿事

「ほほ、敬二君。いよいよ〇〇獣がセメントの中に動かなくなったらしいぞ。見えるだろう。さつきまで穴の中から白い煙のようなセメントの粉が立ちのぼっていたのが、今はもう見えなくなつたから」

「えつ、いよいよ〇〇獣が捕虜になつたんですか」

博士の云うとおり、〇〇獣の落ちた穴の中からは、最前までゆうゆうと立ち昇つていた白気はつきは見えなくなつていた。

博士は穴の方へ飛びだしていった。

「おおい、皆こつちへ集つてくれ。〇〇獣を掘りだすんだ」

さあ、いよいよ問題の〇〇獣を掘り出すことになつた。消防隊はシャベルや鶴嘴つるはしをもつて、穴のまわりに集つてきた。蒸気で動くハンマーも、レールの上を動いてきた。

がんがんどすんどすと、〇〇獣の埋まうずまっている周囲が掘り下げられていった。セメン

トはもはや硬く固っていた。

やがて掘りだされたのは、背の高い水槽タンクほどもあるセメントの円柱だった。

「うむ、うまくいった。この中に〇〇獣がいるんだ。よかったよかった」

と蟹寺博士はもみ手をしながら、そのまわりをぐるぐると歩きまわる。

警備の隊員も見物人も、ざわざわとざわめいたが、折角の〇〇獣も、セメントの壁に距へだてられて見えないのが物足りなさそうであった。

「博士せんせい。〇〇獣はセメントで固めたまま抛ほうって置くのですか」

「うん、分っているよ、敬二君。こいつは用心をして扱わないと、飛んだことになるのだ。まあ儂わしのすることを見ているがよい」

蟹寺博士は、セメント詰めめの〇〇獣をトラックの上に積ませた。そしてそのトラックは騒さわぎを後に、東京ホテルの広場から走りだした。その後うしろからは、幾十台の自動車がぞろぞろとつき従したがってゆく。

やがてこのセメント詰めめの〇〇獣は、帝都大学の構内かまに搬はこびこまれた。

蟹寺博士は先頭さしずに立って、指図さしずをしていた。まずX線研究室の扉ドアがひらかれ、その中に

〇〇獣を閉じこめたセメント柱はしらが搬はこびこまれた。室内は直ちに暗室あんしつにされた。ジイジイと

X線が器械から放射され、うつくしい蛍光が輝きだした。

「ああ、見えるぞ」

博士は叫んだ。蛍光板の中にぼんやりと二つの丸い球が見えだした。

後からついてきた人たちも、それつというので眼を睜みはった。

「どうもこの儘ままでは危い。この二つの〇〇獣を互いに離して置かないと、いつまた前のよ
うにぐるぐる廻りだすか分らない。さあ、この辺から、セメントの柱を二つに鋸のこぎり引き
をしてくれたまえ。柱が壊こわれないようにそろそろやるように注意を頼む」

恐ろしき謎

鋸引きの音が、ごりごりいつている間に、敬二は博士のそばへいつて声をかけた。

「博士せんせい、なぜ〇〇獣を別々に離して置かないと危いのですか」

「うん。これは〇〇獣の運動ぶりから推おして、そういう理屈になるんだよ。つまり〇〇獣

というのは二つの球が互いに相手のまわりに廻っているんだ。丁度二つの指環を噛みあ

わしたような恰好に廻っているんだ。こういう風に廻ると、二つの球は互いに相手に廻転力を与えることになるから、二つの球はいつまでも廻っているんだ。だから二つの球を静止させるには、二つの球の距離を遠くへ離すより外なのだ。見ていたまえ。もうすぐ〇

獣と〇獣とが切り離せるから

鋸引きが済んで、セメント柱は二つに切られた。博士の指図によって、消防隊の人々が一方のセメント柱に手をかけて、えんやえんやと引張った。

「これは駄目だ。中々動きそうもない」

「そんなに強いかね。じゃあ、もつと皆さんこつちへ来て手を貸して下さい」

更に人数を殖やして、えんやえんやと引張った。するとセメント柱は、やつと両方に離れだした。

「しめた。もつと力を出して。そら、えんやえんや」

うんと力を合わせて引張ったので、セメント柱はごろごろと台の上から下に転がり落ちた。

あつと思つたが、もう遅かった、ぐわーん、どどーんと大きな音とともに真白な煙が室

内に立ちのぼった。

人々の悲鳴、壁や天井の崩れる音。思いがけないたいへんな椿事ちんじをひきおこしてしまつた。

敬二少年も、この大爆発のために、しばらくは気を失っていた。暫く経しばらつてやつと気がついてみると、壁も天井もどこかへ吹きとんでしまつて、頭上には高い空が見えていた。あたりを見ると、そこには大勢の人が倒れていた。セメントの破片が白く飛んでいた。

しかし不思議なことに、○○獣の姿はどこにも見当らなかった。

なぜ大爆発が起つたのやら、なぜ○○獣がいなくなったのやら、そこに居合わせた誰にもさっぱり解らなかつたけれど、ずつと後に、やはりあのととき重傷を負つた蟹寺博士が病院のベッドの上で繃ほうたい帯をぐるぐる捲きつけた顔の中から細々とした声で語つたところによると、

「僕の失敗じゃ。○○獣を切り離れたのがよくなかつた。○○獣が互いに傍にいる間に、お互いの引力で小さくなっているんだが、あれを両方に離してしまつと、引力がなくなつてしまうから、それで急に大きく膨ふくれて、あのとおり爆発してしまつたのだ。○○獣はもととも瓦斯ガス体たいだつたが、ああして廻りだすようになってから形が小さくなつて鉄の塊かたまりみた

いに固くなっていたんだ。だから二つを両方に離すと、どっちももとの瓦斯体になり、後には何にも残っていないのだ。じゃ〇〇獣というのは何物だったかといえ、あれは宇宙を飛んでいる二つの小さい星雲が或るところで偶然出会い、それからあの激しい収縮しゅうしゆくと強い廻転が生じて、それがたまたま地球の中をくぐりぬけていったのだよ。全く珍しい現象だ。随分恐ろしいことだった」

博士はベッドの中で大きな溜息ためいきをつきながら、そういうのであった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第5巻 浮かぶ飛行島」三一書房

1989（平成元）年4月15日第1版第1刷発行

初出：「ラヂオ子供のテキスト」日本放送出版協会

1937（昭和12）年9月

入力：tatsuki

校正：浅原庸子

2003年11月24日作成

2011年9月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

〇〇獣
海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>